

所属より，帰属がいい！

日本病院薬剤師会常務理事
鹿児島市立病院薬剤部

有馬 純子 Junko ARIMA



皆様，「帰属意識」について考えたことはありますか？

最近，自身が人恋しくなっているのか，折に触れて「私はどこにいるのだろう」と考えることが多くなりました。心理学や社会心理学においては「特定のグループに属しているという意識」を指し，「これは自分の集団だ」「自分もコミュニティの一員である」と感じる主観的感覚が重視されるようです。

では，日々の私たちの活動の場面ではどうでしょうか。私は病院の職員であり，それと同時に鹿児島市の職員でもあります。これは「所属」です。学会のネームカードや各種書類に記載する勤務先のイメージでしょうか。「言葉のこだわりに過ぎない」と言う方もあるかもしれませんが，確かに「所属」は事実や客観性を反映しているように思います。

私がこの「帰属」「所属」を思うようになったのは，組織をまとめる立場になってからかもしれません。就職した頃は，「〇〇病院の人」になったことや，施設名を冠に自己紹介が進むことに驚きを感じ，名刺を持つようになると「施設を代表する気持ち」に，そして多くの部門や多職種との交流にあっては「薬剤師を代表する気持ち」になりました。今，薬剤部長として，鹿児島県病院薬剤師会会長として，日本病院薬剤師会常務理事として動く時，さらに「みんなと一緒にやりたい」という思いが強くなっている気がします。

施設の一員として環境を整え，目標を共有してともに進むことは，多くの方の日常だと思います。では，病院薬剤師会となるといかがでしょうか。「上司に言われたから」「保険があるから」「認定が取れるから」。もちろん，これら理由も間違いではありませんが，まさに「所属」です。せっかく施設から出るのであれば，地域を支える組織として，また自分のやりたいことをかなえる場として，より深くかかわってみるのはどうでしょう。研修会も知識や単位を得るだけでなく，人との交流で得た気付きを自分の組織に還元する場として利用してみると，少しだけ愛着が湧いてきませんか。日々の困りごとを一緒に考える仲間をつくる，一番身近なコミュニティの1つだと考えます。

また，日本病院薬剤師会でも，病院薬剤師の現状課題を改善するための取り組みや，全国規模の研修会を行っています。まさに「日本の病院薬剤師」という枠組みです。薬剤師活動の発展は，日本の未来にとって決してマイナスにはなりません。一人で行えることには限界があり，アイデアが行き詰まることも知っています。それもここにいる同じ思いの仲間と一緒になら，何かしらのヒントを得られるはずです。

これら病院薬剤師会の活動はすべて，皆様からいただく会費に支えられています。会費を納めることはもちろん大切ですが，せっかく納めているのですから，ただ「所属」するのではなく，自分が「帰属する」組織にもっと手足を突っ込んで触れてみるのはいかがでしょうか。一人の活動が，施設や地域，都道府県を動かし，そして日本を変えるものへとつながる，そんな可能性がこの会にはあります。そんな組織の一員，「帰属意識」を感じられる病院薬剤師会を，皆様と一緒につくりたいと思います。